

篠山横穴墓と「古墳の道」

加藤 大二郎^(*)

1 茅ヶ崎の地理的・歴史的環境（第1図）

本論では、茅ヶ崎市内の横穴墓と全国の古墳から、古墳時代の墓に対する意識の一部を垣間見ていく。

まず、市内の地形は北の相模原台地と南の低地帯に大別される。北の台地は起伏の激しい丘陵地形が主体をなし、東側から赤羽根、堤、芹沢、行谷、下寺尾の集落がこの台地上に存在している。

相模原台地上では旧石器時代後期（3万年～1万年前）から現代に至るまでの人間活動の痕跡があり、茅ヶ崎市内で確認された最古の痕跡はこの北部の旧石器にあたる。その後の縄文時代においても台地上での活動が主体となっており、南部の砂丘上に生活の基盤が本格的に移動するのは弥生時代に移行してからで、古墳や横穴墓はなお北部の丘陵に多く確認されている。古代においても、官衙遺跡群が下寺尾周辺に確認されており、古代までの活動の中心は北部に集中している。

2 「古墳の道」とは

筆者は形象埴輪群の偏った配置から古墳には「見る・見せる」機能を持たせており、その配置要因に主体部、周辺遺跡（集落・居館など）、周辺景観が関わる可能性があると考えている。例えば、群馬県保渡田古墳群と三ツ寺Ⅰ遺跡（居館跡）では、保渡田八幡塚古墳において形象埴輪群集中域が主体部から見て居館方向と先に築造された井出二子山古墳方向に位置しており（第2図）、榛名山―主体部―形象埴輪群―居館が直線上に並び、興味深い配置状況を示している。他にも、古墳時代後期の大坂府今城塚古墳（第3図）や宮崎県百足塚古墳（第4図）では堤上の横穴式石室開口部正面に形象埴輪群が集中しており、形象埴輪の正面と石室開口方向が一致するパターンを持つ古墳が数多く存在している。

ところで、古墳時代前期と後期では、前方後円墳を築造する立地に変化が生じている。例えば、逗子

市桜山および三浦郡葉山町長柄に長柄桜山古墳群一号墳と二号墳が所在している（第5図）。前期の前方後円墳である長柄桜山古墳群は「1号墳からは現在の逗子市街地や東京湾を、丘陵先端に位置した2号墳からは相模湾を望むことができる（広瀬 2007）」位置に、丘陵を開拓し、巨大な墳丘を築造している。

後期になると、埼玉県に所在する埼玉古墳群（第6図）や群馬県綿貫観音山古墳（第7図）など、平野部に立地するものや、前期のように一見丘陵尾根に築造されるものの、墳丘の小型化に伴い、より平野部寄りの低い位置に立地の選択性が移行する。また、当時の集落は平地や少し小高い丘に位置することが多い。

つまり、前期では古墳を平野や付近の丘陵、あるいは海などの集落や他の古墳、交通路といった、人々の目から常に見える位置につくるのに対して、後期では集落と古墳の標高差を小さくし、見える距離を近くしている。

当時の人々が古墳に対して築造後にも効力を持たせていたのであれば、その古墳行為のために古墳に近づく必要が発生する。その際に使うものが「古墳の道」となる。

ここでは、茅ヶ崎市香川に所在する古墳時代終末期の横穴墓と地形から、「古墳の道」が存在することを明らかにし、墓に対する「見る・見せる」意識を再認識する。

3 市内の横穴墓

横穴墓は現状開口しているものを除けば、土砂崩れなどを契機として開口部が見えなくなっている。そのため、記録や伝承が存在しない場合は工事中の不時発見によって新たに確認されることが多い。

市内には、すでに開発等で消滅しているものを含め、70基以上の横穴墓が確認されており（第8図）、その多くは縄文海進の際に波で形成された急崖に穴

を掘ることによってつくられている。この横穴墓が集中している丘陵は北の下寺尾や堤と南の香川や甘沼の集落の境に位置している。現在では市内を南北に行き来することのできる道路ができているが、道路が開発されるまでは中近世から続く切り通しや、自然の谷を利用して南北の移動をしていた。現在の道路の一つに、茅ヶ崎駅から本村、円蔵、香川を通り下寺尾に抜ける主要道路があり、香川一下寺尾間にある湘南ローンテニスクラブとスリーハンドレッドクラブの間に形成されていた谷（てしお坂）には篠山横穴墓と篠谷横穴墓が確認されている（第9図）。この「横穴発見の丘は篠山又は穴山と呼ばれ（赤星1975）」、古くから穴があったことがわかっていた。

4 篠山横穴墓とその周辺

篠山横穴群においては1984年に発掘調査が実施されている。調査の結果、横穴の羨道が階段状になっており、調査当時の道にぶつかっていたことが判明した。これによって、調査時の道は少なくとも古墳時代から連続と続くものであったことが明らかとなった。

また、先に述べたように横穴墓は工事中に発見されることが多く、玄室以外の残存状況が悪いことから、このように羨道や前庭部が道（谷）に関連することを確認できる事例は貴重である。

次に、篠山横穴墓群周辺の古墳時代の遺跡を確認すると（第10図）、篠山横穴墓の南西部と北西部にまとまっており、北部および北東部は駒寄川によって削られてしまったためか、行谷や堤まで古墳時代の痕跡は少ない。この状況からは古墳時代における香川一下寺尾の交通路は篠山横穴墓群の存在する湘南ローンテニスクラブの丘よりも西側を利用していたと考えられる。以上のことから、この谷を古墳時代に利用していた可能性は、地元集落の構成員が利用する裏道であった程度か、あるいは行谷・堤－香川間の道としてと考えられる。

5 古墳の情景

以上のことから、この谷を道として利用することがあったと考え、この道を通る際には必ず横穴

が見える状態であったことが想像できる。つまり、古墳時代終末期には古墳を道から目に入る位置に立地させていたことがうかがえる。

古墳時代前期では大規模古墳の築造により、不特定多数の人の目に触れるようにしていたが、中期、後期になるにつれて見せる対象は限定され、終末期には主に共同体にむけた古墳造営システムとなっていたと考えられる。

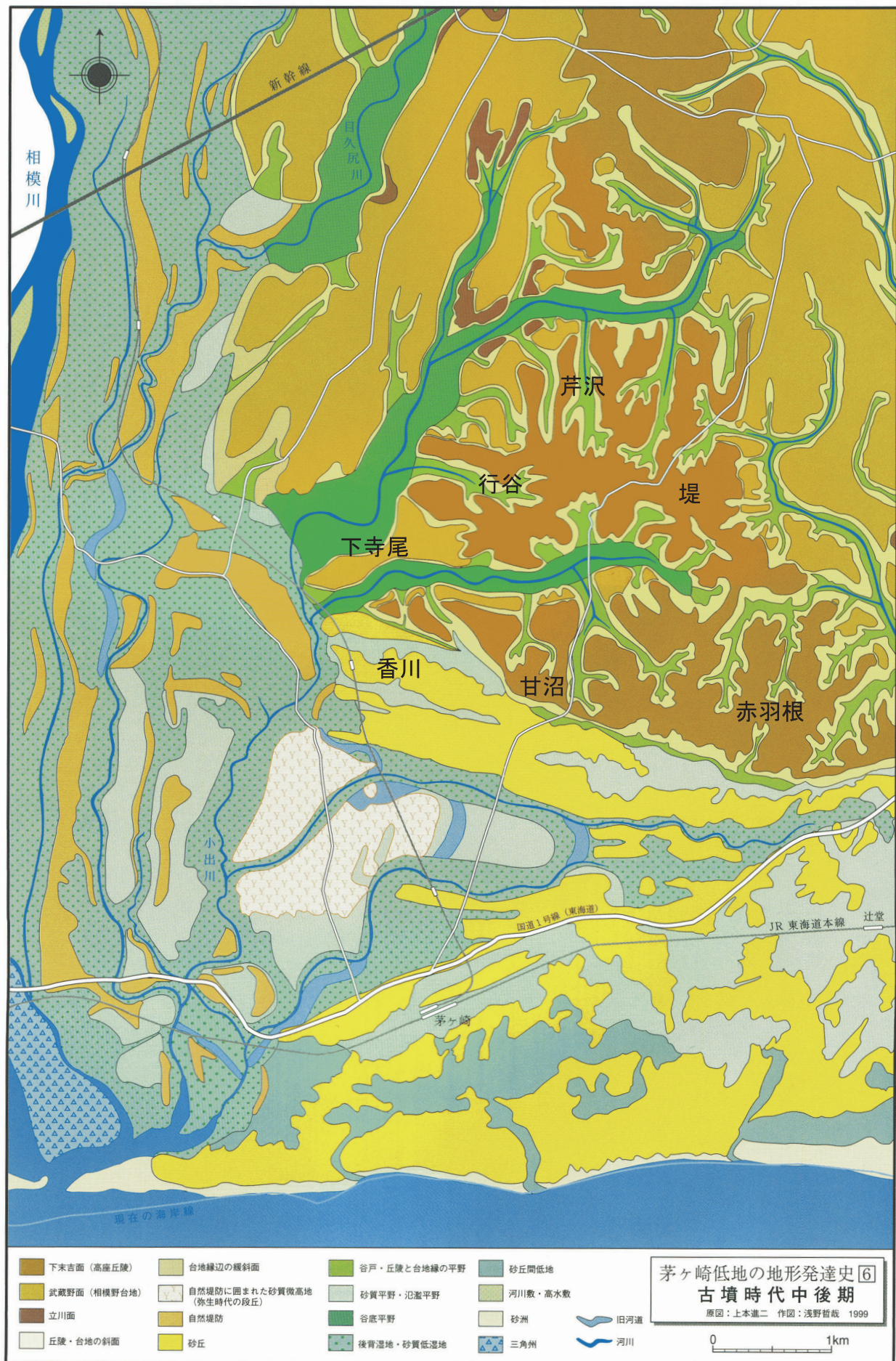
参考文献

- 赤星直忠 1975 「茅ヶ崎市篠谷横穴群調査概報」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告8』
- 石野博信 1990 『古墳時代の研究 2 集落と豪族居館』
- 上本進二・浅野哲也 1999 「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告7』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2008 『埴輪群像の考古学』
- 群馬町教育委員会編 2000 『保渡田八幡塚古墳（調査編）』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1998 『綿貫観音山古墳』1 墳丘・埴輪編
- 近藤義郎 1991 『前方後円墳集成』東北・関東編
- 近藤義郎 1991 『前方後円墳集成』九州編
- 近藤義郎 1992 『前方後円墳集成』近畿編
- 逗子市教育委員会 2004 『史跡名越切通確認調査報告』
- 逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 2009 『国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査概要報告書』
- 高槻市教育委員会編 2004 『発掘された埴輪群と今城塚古墳』
- 茅ヶ崎市 1994 『地図集 大地が語る歴史 茅ヶ崎市史』現代7
- 広瀬和雄 2007 「相模の二つの古墳群」『季刊考古学別冊15』

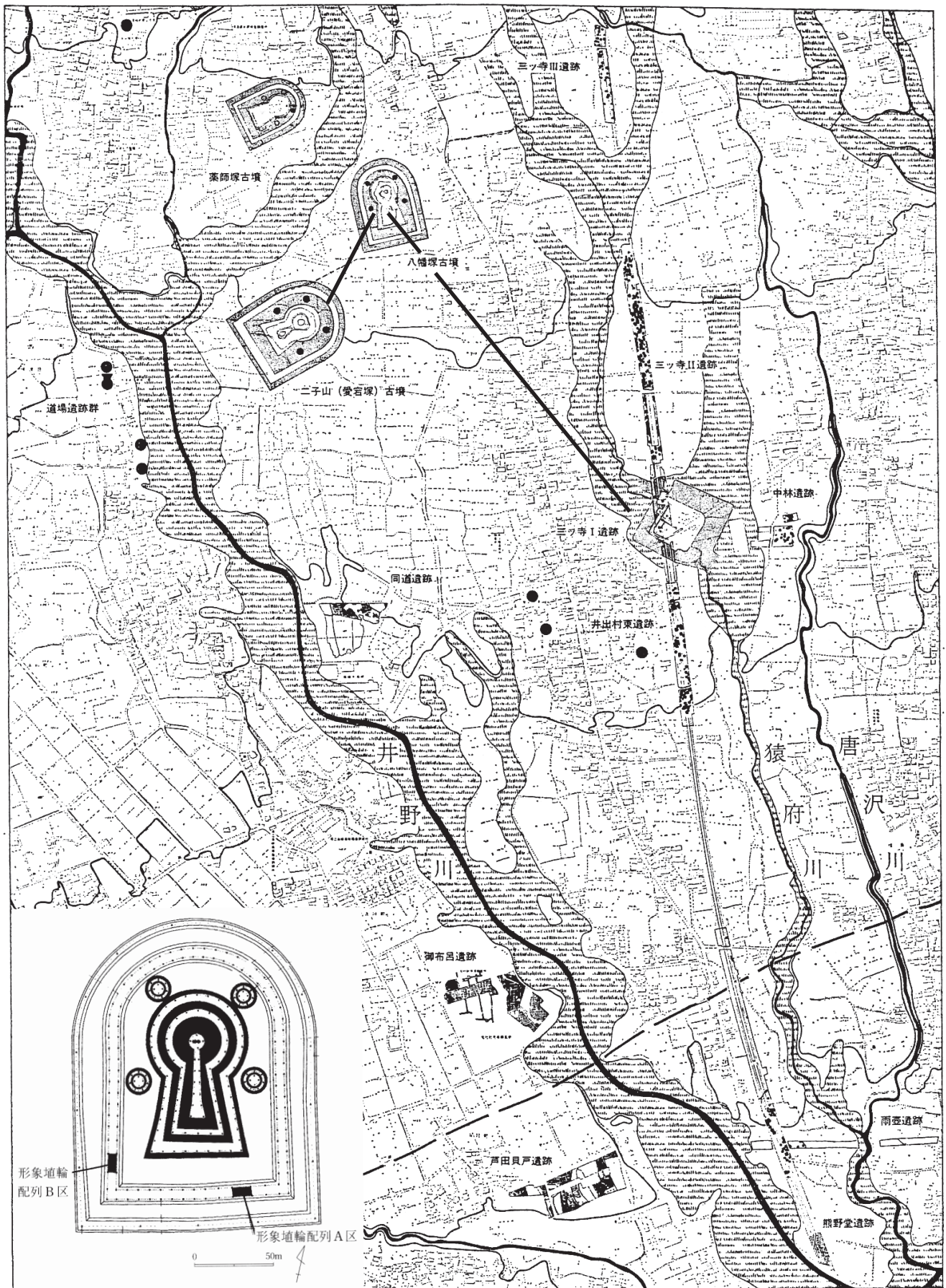
＊茅ヶ崎市教育委員会社会教育課

謝 辞

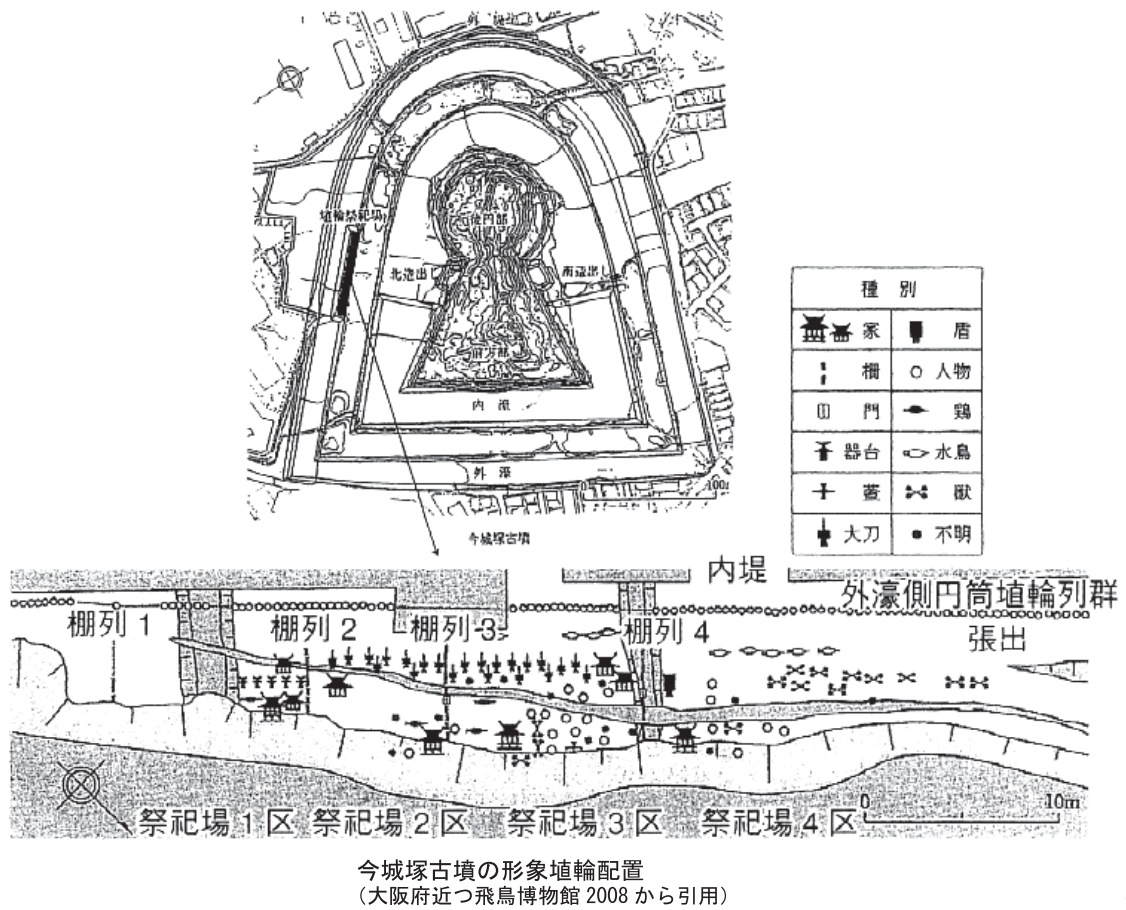
本稿執筆に際して、助言や調査当時の様子を教えていただいた茅ヶ崎市教育委員会の富永富士雄氏と大村浩司氏、資料収集および図版作成に協力していただいた國學院大學学生の浅海莉絵氏、小松崎百恵氏に感謝いたします。

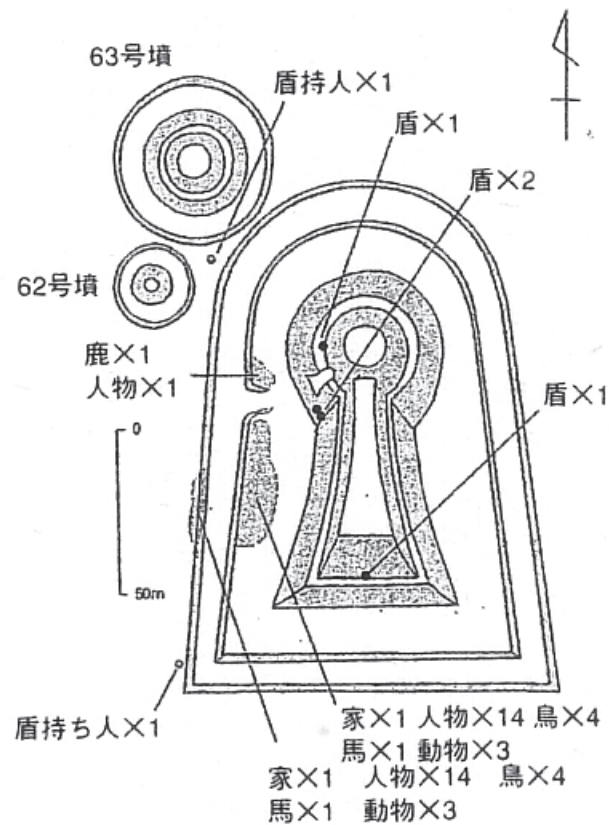


第1図 古墳時代における茅ヶ崎の地形
(上本・浅野 1999 から引用、加筆)

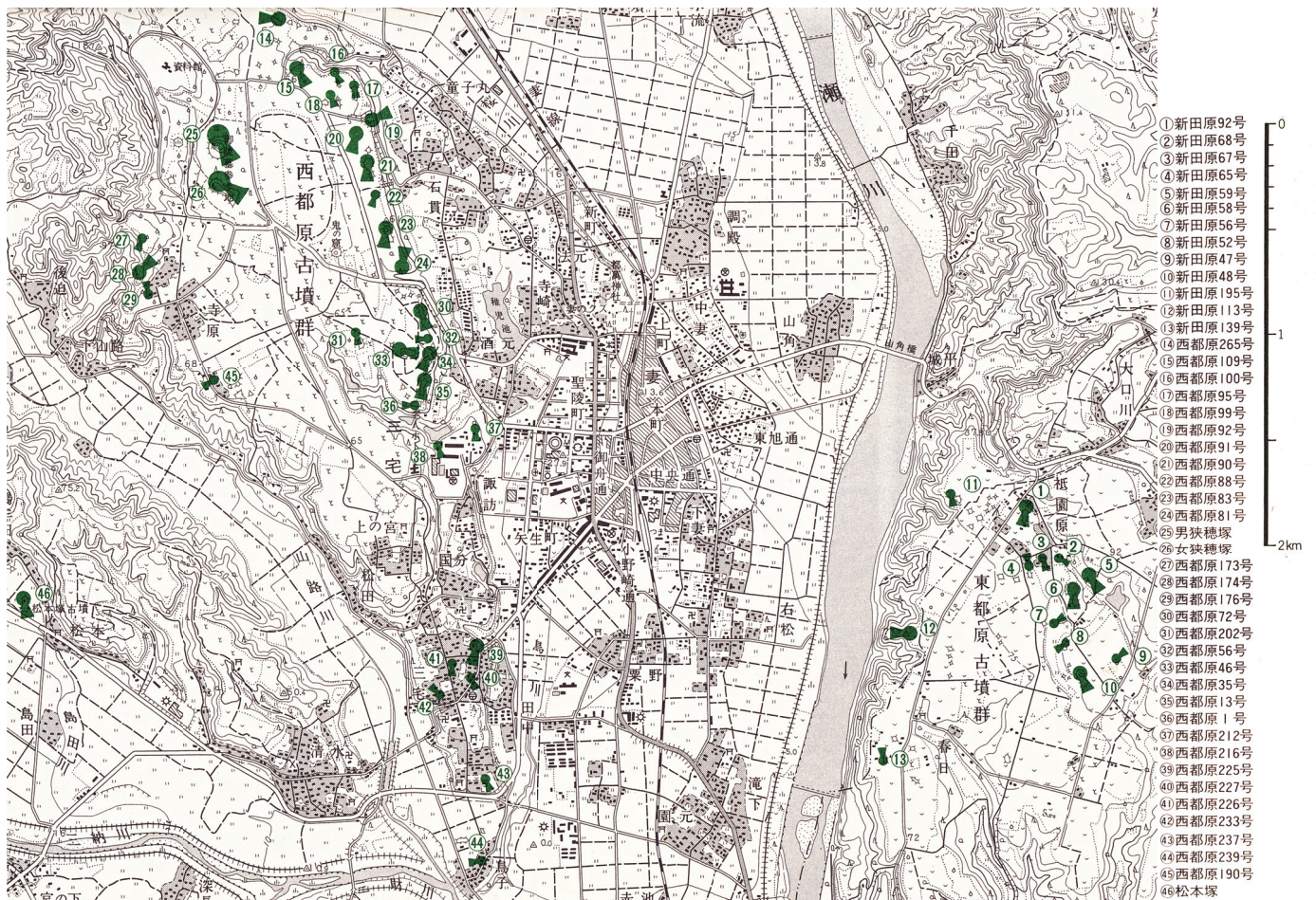


第2図 保田八幡塚古墳と周辺遺跡位置関係図
(大阪府立近つ飛鳥博物館 2008、石野 1990 から引用、加工)





百足塚古墳（新田原 58 号）の形象埴輪配置
(大阪府近つ飛鳥博物館 2008 から引用)

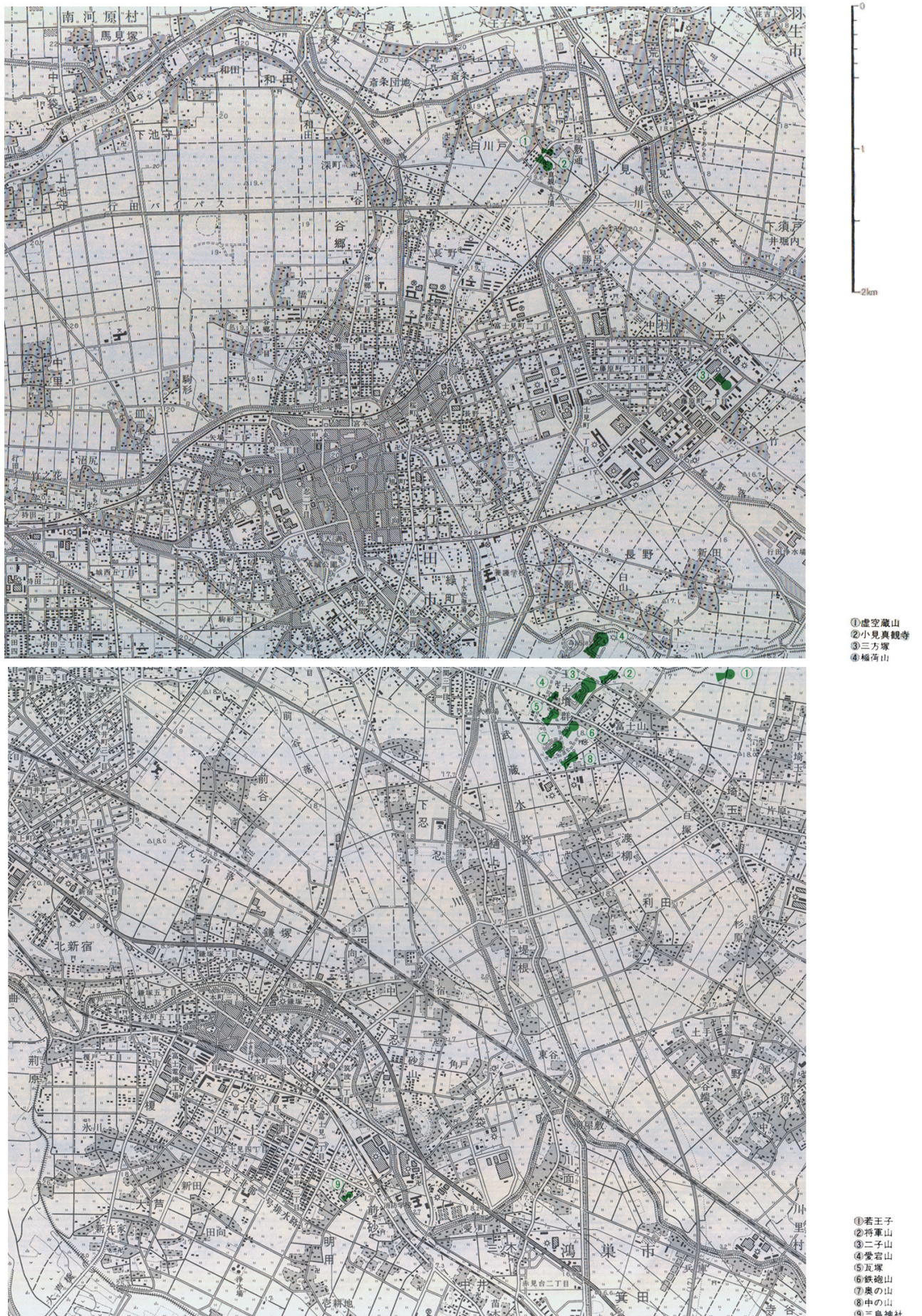


百足塚古墳の立地
(近藤義郎 1991 から引用、加工)

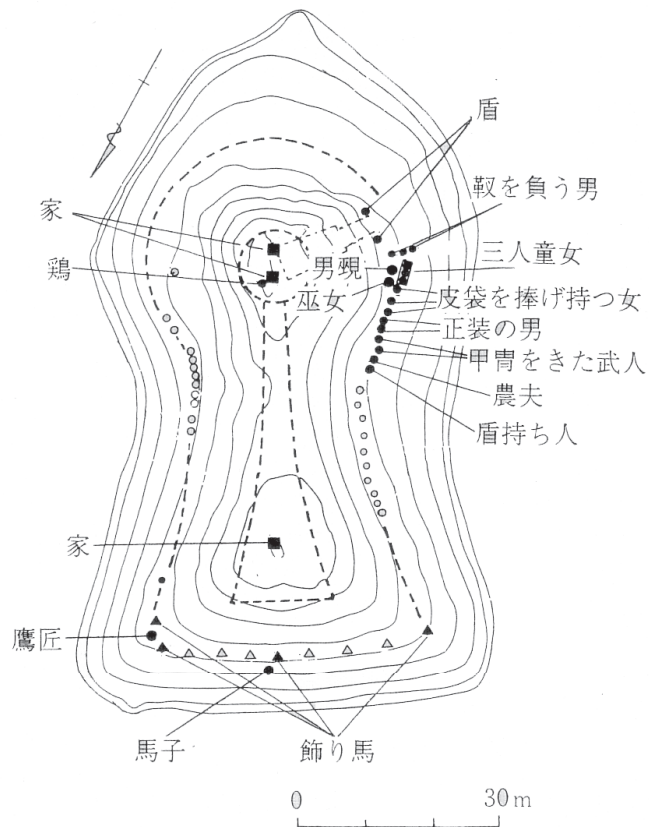
第4図 百足塚古墳について



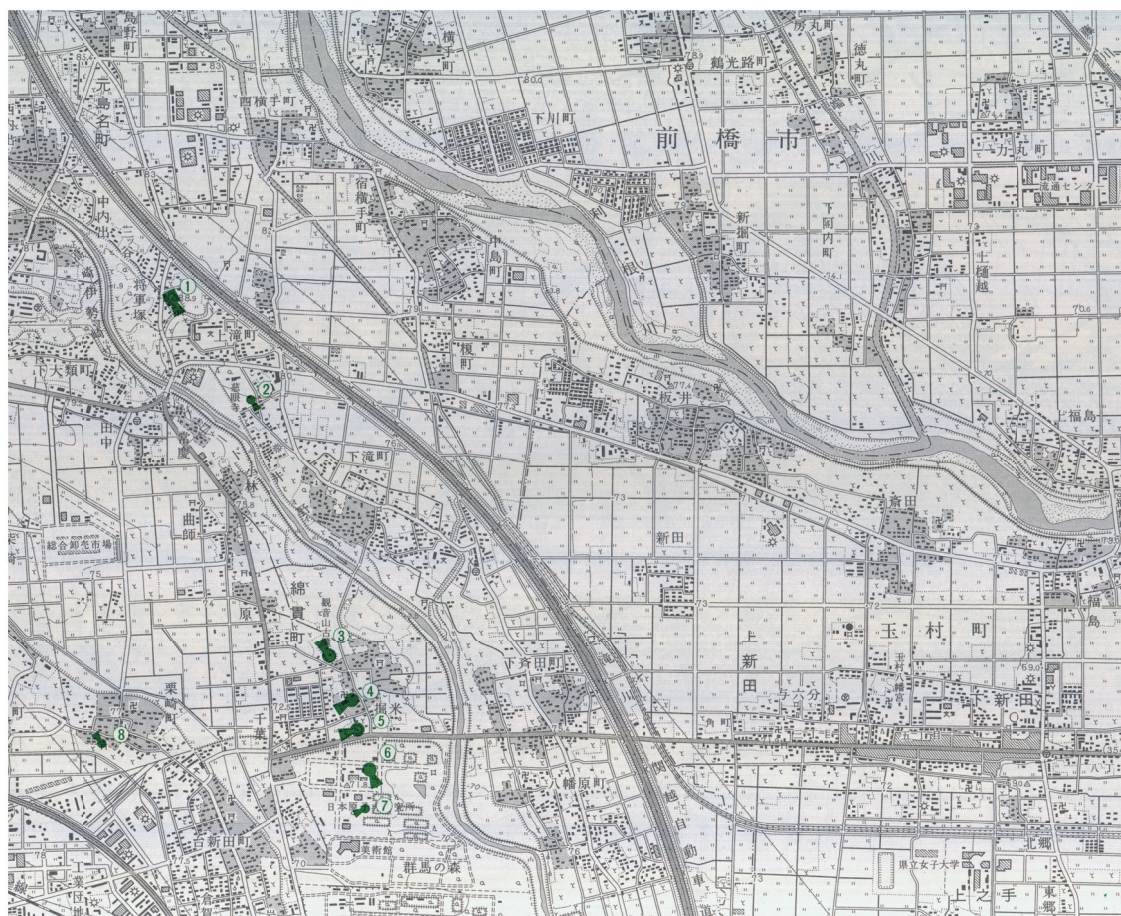
第5図 長柄桜山古墳群の立地
(逗子市教育委員会 2004 から引用)



第6図 埼玉古墳群の立地
(近藤 1991 から引用、加工)



綿貫観音山古墳の形象埴輪配置
(大阪府近つ飛鳥博物館 2008 から引用)



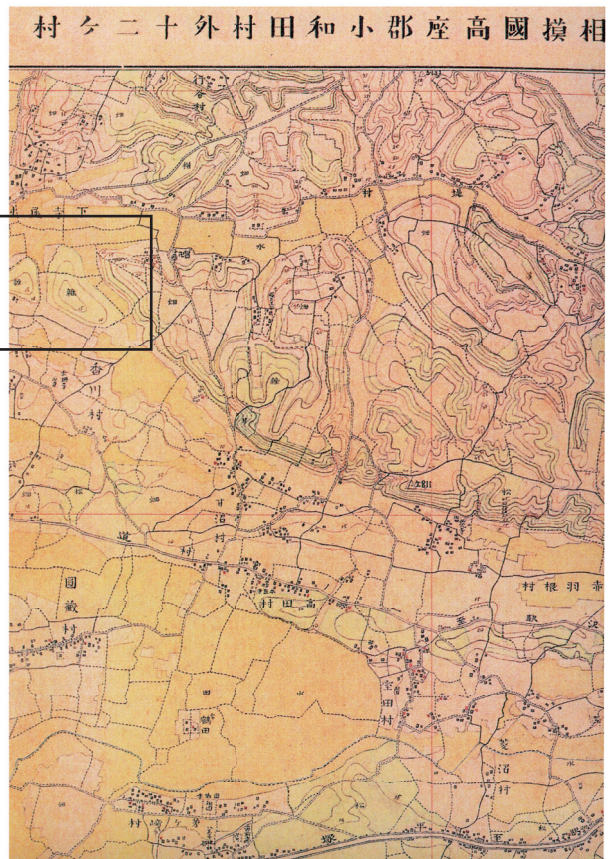
- ① 元島名符軍塚
- ② 前山
- ③ 綿貫観音山
- ④ 普賢寺裏
- ⑤ 不動山
- ⑥ 岩鼻二子山
- ⑦ 金堀
- ⑧ 栗崎飯玉山

綿貫観音山古墳の立地
(近藤 1991 から引用、加工)

第7図 綿貫観音山古墳について



第8図 茅ヶ崎市内の横穴墓
(上本・浅野 1999 から引用、加筆)



1882 年の篠山周辺における土地利用
(茅ヶ崎市 1994 から引用、加工)



篠山周辺における道路整備以前の状況
(1969 年 6 月撮影航空写真を加工、加筆)

第 9 図 篠山横穴墓と篠谷横穴墓に見る「古墳の道」

() 茅ヶ崎北部における古墳時代の遺跡範囲

44